ー 未来へつなぐ 富山市の教育 ー

Sign（サイン）

vol.7
2024

対談 ご覧あれ! 等身大の私たち

教えて教育コラム

話題のGIGAスクール構想について、深井呉羽小学校長に聞きました。

―使いながら学ぶ―

最初にGIGAスクール構想推進校となったのは令和3年のことでした。ちょうど、一人一台端末が学校に入った時であり、とにかく使ってみることから始めました。

先生って、自分が使い方をわかっていて、教えなければいけないという感覚があるのですが、先生たちには「子どもたちに自由に使わせて」と言いました。失敗もするけれど、子どもと一緒にルールを決めて、使いながら学んでいくって大切だなと思っています。

―新しい学びのスタイル―

以前は自分の考えをノートに書いて持ち寄ったり、要点を付箋に書いたものを模造紙に貼ったりして、互いの考えを見合ったりまとめたりしていました。これがChromebook上でできるようになったことで、先生や子どもたちが直ちに確認でき、つまずきや他の人の考え方がすぐにわかるようになり、協働的に学んでいます。当初は「明るいカンニング」と呼んでいました(笑)。

―「明るいカンニング」(他者参照)―

カンニングというと何か悪いことのような気がしますが、誰かの考えを「盗む」ではなく、「参考にしていいよ」、「人のを見て学ぶ」ということだよと伝えました。

気軽に他者参照できるようになったことで、これまで自分から「わからない」と言えなかった子どもが、Chromebookで仲間の状況を見ながら考えるようになり、そうすると、その様子に先生も気づき、個別指導に入りやすくなります。結果として、「できた」と子どもが感じることが多くなり、より自信をもてるようになったと感じています。

―ホンモノにふれる―

情報を簡単に入手することができて便利なのですが、一方で、子どもはわかった気になり、本当にその情報が正しいのかどうか、その情報を活用して考えをまとめたときに、それは本当にその子の考えなのか、対話し、確認することが大切です。

だから私たちは、今、実際に体験してみることを重要視しています。呉羽ですので、梨の受粉作業や摘果をやってみて、「あなたの体験した苦労は、農家の方のほんの一部ですよ」と伝え、五感をフル活用して考えさせています。

学校再編新聞

統合後通学にコミュニティバス

樫尾小試乗体験 降雪時の登下校を学校側と確認 ～全校児童21名参加～

富山市教育委員会と同市交通政策課は、今年1月15日と25日、4月に統合を控えた同市立樫尾小学校の児童21名を対象に、通学に用いるバスの試乗体験を実施した。

市教育委員会によると、市は樫尾小学校がある黒瀬谷地区においてコミュニティバスを運行しており、現状、統合先となる八尾小学校を経由しないルートとなっている。樫尾小学校の児童が統合先の八尾小学校まで通学するためには、コミュニティバスのルートを変更するのか、専用のスクールバスを運行するのか、対応を迫られていた。

児童の自宅から程近いコミュニティバスの停留所で乗降車し、通学負担を軽減させたいという地域や保護者の要望を受け、今年2月に、市は統合先である八尾小学校を経由するようコミュニティバスのルートやダイヤの一部変更を決定した。

市教育委員会の担当者は、「今回の試乗のように降雪が予想される場合は、特に安全安心な登下校ができるよう努めてまいりたい。今後、他地域で学校統合により遠距離通学となる場合には、保護者の不安の声に耳を傾け、こうしたコミュニティバスの活用やスクールバスを運行するなど、柔軟に対応してまいりたい」とコメントした。

教員が見守るなか、八尾小で降車する樫尾小の児童
＝1月25日午前7時40分

YouTubeやってます!

発行・編集　富山市教育委員会事務局学校再編推進課
電話　076-443-2241　E-mail:gakkousaihen@city.toyama.lg.jp

ニューズレターのタイトル「Sign」
私たちは、「保護者」、「学校」、「市」がこのニューズレターを通じて
野球のような「サイン」を送り合うという意味を込めています。

石本 沙織 ＞ 対談 ＜ 富山市教育委員会教育長 宮口 克志

これからの富山市が目指す教育とはどのようなもの でしょうか。未来の教育について語り合いました。

子どもは正直。人間力を培うため、先生も本物にふれてほしい。

— 宮口 克志 —

—石本さんが見た「富山の新しい学び」

石本　昨年、芝園小学校に訪問させていただき、富山市が行っている「新たな学び」を見学させていただいたのですが、本当に驚きました。先生が教えるのではなく、子どもたちが自分で問題や課題を見つけて、その答えをみずから考えていたんです。教室には子どもたちのサポートになるようなヒントがいろいろ散りばめられていて、友達とグループを作る子もいれば、一人で進める子もいて。みんな自分のやり方で主体的に学んでいました。

宮口　今おっしゃった「主体的に学ぶ」というのがポイントで、私たちが考える「未来へつなぐ 富山市の教育」でも、とても大切な部分です。子どもたちが主体的に目標を見つけ、それを達成できると、自信や自己肯定感が生まれます。すると「また挑戦したい」という気持ちになるでしょう。これは私がかつて教員として子どもと接する中で感じていたことでもあります。

今日はぜひ石本さんに見ていただきたくて持ってきたのですが、かつて担任を務めたあるクラスでは、子どもたちが描いた絵や習字と一緒に一人一人の記念写真を撮りました。この絵もただモチーフを描くのではなく、どうすれば立体感が出るのか、今までやったことのない描き方を子どもたちに考えてもらいながら進めました。他の授業もそういうスタイルを多く取り入れましたが、自分で考えて成功すると子どもたちはすぐに次の目標を作ってやり出すのです。

石本　私が覚えている「楽しかった授業」も、自分で課題を見つけて考えていく時間でした。子どもの頃、地球の環境問題が注目され始める中で、これからの環境問題について一人一人課題や解決策を調べたり、意見を出したりする授業があったんです。自分で考えることって子どもながらにすごく楽しかったし、だから記憶に残っているのでしょうね。

宮口　私たちは富山市の教育で重点的に進める3項目を「三つの矢」としていますが、その1つに『主体性のある子どもの育成』の推進」があります。大切なのは「教える」から「育てる」への意識改革であり、教員主導で一方通行に教えるのではなく、子どもたちのもっている能力を伸ばす教育に変えていきたいのです。

—「わからないまま授業が進んでしまう」を減らす

石本　芝園小の授業でも感じましたが、子どもたちの主体的な学びを生むために、先生は教えるというより、きっかけやヒントを与える役割なのかなと思いました。

そしてもうひとつ印象的だったのは、学びを進める「速度」も子どもたちが自分で決めていたことです。同じ授業でも次の問題に行きたい子は行きますし、立ち止まって時間をかけたり、戻って理解し直したい子はそうする。自由に進み具合を決められるのがよいと思いました。

宮口　自由進度学習というものですね。自分のペースで学習計画を立てて進めるので、得意なところはサッと終えて苦手な分野に時間をかけるということもできます。

自分で考えたことって、大人になっても記憶として残るのかなと。

— 石本 沙織 —

石本　その方がきっと子どもは楽しく学べると思います。自分の学生時代を思い返しても、クラス全員が同じペースで授業を進めると、すぐに内容を理解できたときは「早く次の問題に行ってほしい」と思いましたし、逆にわからないときはどんどん先に進むとつらいですよね。

宮口　わからないまま授業が進むと、次第にその子は授業が楽しくなくなってしまいます。そうではなく、わかった子はどんどん進めてもいいし、逆に途中で苦しんでいる子に手を差し伸べることもできるでしょう。

石本　友達なら気軽に「教えて」と言えるし、頼まれた子も教えることで気づきがあったり、記憶に残ったりしますよね。それも学びになると思います。

宮口　大切なのは、そういった教え合う環境が生まれるには一定規模の集団、ある程度の人数の学校環境が理想的ということです。すると体育でみんなを引っ張る子がいれば、算数が得意で教えてあげる子も出てきます。いろんな価値観や得意不得意のある子がいることに気付いていけるでしょう。三つの矢の2つ目に「多様な学びの場の提供」がありまして、そこでは一定規模の集団の中で学ぶ環境づくりをポイントにしています。

石本　子どもたちの人数が減っていく中で、これからどのようにその状況をつくっていくか、一定規模の集団で学ぶ環境をつくることが大事ということですよね。

宮口　もちろんそういう環境が苦手な子もいるので、少人数で学ぶ小規模特認校や不登校の子どもに向けた学びの多様化学校（不登校特例校）なども検討しています。こういったことを、三つの矢の3つ目「保護者や地域との協働」として、保護者の方、地域の方と一緒に考えていければと思います。

—未来の教育を担う先生たちへのエール

石本　富山市の目指す教育がよくわかりましたし、新しい挑戦に向けて先生たちにもエールを送りたくなりました。

宮口　主体的な学びを行うと、子どもたちは教科書にないことをたくさん聞いてきます。だからこそ教員も、教科の指導方法だけでなく幅広い知識や人間力を培うことが大切になるでしょう。私たちが行う教員向けの研修でもさまざまな分野を知る機会をつくっていますが、いろんな世界の“本物”を学び、人間力を培っていくことを期待しています。

石本　親としてつくづく感じますが、子どもは先生がどんな人かを敏感に見ていますし、この先生は信頼できると思えばどんどん質問したり、相談したりします。だからこそ宮口さんが言ったように、先生自身も人間力が問われるのかもしれません。私もアナウンサー時代、技術をつけるのはもちろん大事ですが、それよりもまず「人として素敵でありたい」と考えてきました。そんなことも思い出しましたね。

宮口　人は「信頼している人の話しか聞かない」と言いますからね。特に子どもは正直ですから、教員への信頼がすべてのベースになります。教員も私たちも日々学びながら、子どもたちからも教えてもらいながら、富山市の教育をよりよくしていきたいと思います。

文：有井　太郎　　撮影：田中　祐樹（田中広告写真）